

国司尾遺跡

-共同墓地造成に伴う発掘調査-

2002年3月

岡山県
勝央町教育委員会

国司尾遺跡

－共同墓地造成に伴う発掘調査－



調査区全景(東南から)



調査区全景(西から)



出土土器

図6-1



図6-3



図6-5



図6-2

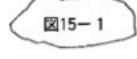


図15-1

序

岡山県勝央町は、町の中心部を南北に滝川が流れ、またなだらかな丘陵地帯であることから、古来より人々が住みはじめ、町内には数多くの遺跡が存在し豊かな文化を育んでいます。

近年、岡山と美作を結ぶ高規格道路、通称東部横断道の建設が計画され、勝央町の小矢田地区に路線決定がなされました。これに伴い路線内に所在する墓地を集合させ移転するための共同墓地を造成することになりました。計画地には今回報告します国司尾遺跡が存在していることからその保護・保存について原因者側と協議を重ねてまいりましたが、現状での保存が困難なため、やむをえず記録保存の処置をとることとなりました。

国司尾遺跡では、弥生時代の集落跡の一部が発見され、また近世の墓も検出されました。遺跡の所在する小矢田地区においては初めての本格的な発掘調査であり、当該地区の歴史を知るための重要な成果があげられました。こうした調査の成果は現代を生きるわれわれに何らかの形での示唆を与えてくれるものであると思われます。

この報告書が勝央町の歴史を理解するための一助となり、また広く一般の方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を高める上で役立てば幸いです。

調査にあたっては、多岐にわたりまして様々なご尽力をいただきました地元の方々、および発掘調査に参加していただいた方々をはじめ、各方面からのご支援、ご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

平成14年3月31日

勝央町教育委員会

教育長 岸 本 耕 二

例　　言

1. 本書は、岡山県勝田郡勝央町小矢田地内に所在する国司尾遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、小矢田地区墓地造成に伴うもので、勝央町の委託を受けて、勝央町教育委員会が平成13年度に試掘調査、発掘調査、報告書作成作業を実施したものである。
3. 国司尾遺跡は当初、国司尾散布地A、Bとして調査に入ったが、調査によって遺跡が確認され、遺跡が一帯に広がると判断したためアルファベットを省き名称を変更した。
4. 国司尾遺跡は、岡山県勝田郡勝央町小矢田976ほかに所在する。
5. 発掘調査は、確認調査、全面調査の2次にわたって行い、それぞれ、平成13年8月28日～9月4日および平成13年10月18日～12月4日の期間に行った。
6. 調査および報告書作成は勝央町教育委員会社会教育課が行い、調査および本書の執筆編集は勝央町教育委員会社会教育課　園　正雄が担当した。
7. 本報告にかかる遺物・写真・図面は勝央町教育委員会で保管している。
8. 本書の作成にあたり、現地調査および整理作業時に関係各機関をはじめ、多くの方々に有益なご教示、ご指導を賜ったことに感謝の意を表します。
9. 発掘調査に際して以下の方々のご協力をいただきました。記して感謝の意を表します。

神尾泰三 小林るり 植田和枝 権田美栄 権田睦恵 鳩津洋一 西田節子
平井重光 前田 恵 宮野房江

凡　　例

1. 本書に示す標高値は東京湾標準潮位（T.P.）を基とし、方位は磁北を指す。
2. 本書第2図に使用した地形図は国土交通省国土地理院発行の2万5千分の1地形図「津山東部」、「真加部」を複製したものである。
3. 本書に掲載した造構は、段状造構、土壙などの種別ごとに通し番号を付けている。
また、近世とした造構は一部近現代のものを含むが括して扱った。
4. 本書における造構および遺物実測図の縮尺については原則として住居、段状造構は1/5、土壙は1/4縮小。また、遺物は1/4縮小としている。

本文目次

序

例言・凡例

目次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 発掘調査の経緯と経過	
第1節 調査にいたる経緯	4
第2節 発掘調査の経過と概要	5
1. 確認調査	5
2. 発掘調査	6
3. 日誌抄	6
第3節 発掘調査の体制	6
第3章 発掘調査の概要	
第1節 遺跡の立地と調査区の概要	7
第2節 調査の概要	8
1. 弥生時代の遺構・遺物	8
住居	8
段状遺構	10
土壤	11
柱穴列・溝	12
2. 近世以降の遺構・遺物	14
土壤墓	14
火葬墓	16
第4章 まとめ	19

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	1	第12図 段状遺構5	11
第2図 周辺の遺跡分布図	2	第13図 土壙1	12
第3図 計画地周辺図	4	第14図 土壙2	12
第4図 確認調査トレーン配置図	5	第15図 柱穴列・溝1・P2出土遺物	13
第5図 遺構全体図	7	第16図 土壙墓1	14
第6図 住居1・出土遺物1	8	第17図 土壙墓2	14
第7図 住居2	9	第18図 土壙墓3	15
第8図 段状遺構1	10	第19図 土壙墓4・直上石組	15
第9図 段状遺構2	10	第20図 土壙墓4	15
第10図 段状遺構3	10	第21図 火葬墓1	16
第11図 段状遺構4	10	第22図 火葬墓2	18

図 版 目 次

図版1 住居1(東から)	柱穴列・溝1(東から)
住居2(東から)	土壙墓2(西から)
段状遺構1(東から)	土壙墓3(東から)
図版2 段状遺構2(東から)	図版5 土壙墓4(西から)
段状遺構3(西から)	火葬墓1(西から)
段状遺構4(東から)	火葬墓2(西から)
図版3 段状遺構5(西から)	
土壙1(東から)	
土壙2(西から)	

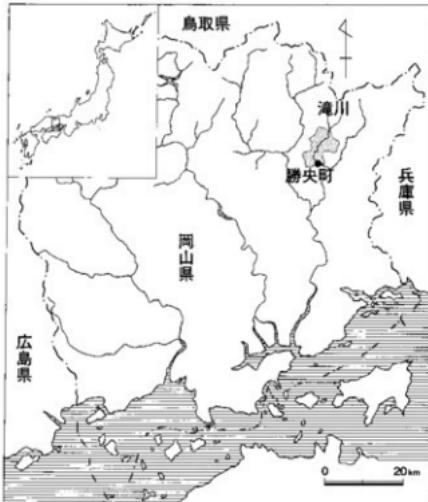
第1章 地理的・歴史的環境

勝央町は、岡山県の北東部に位置しており、西に津山市、北は勝北町、奈義町、東は勝田町、南は美作町、櫛原町に接している。勝央町を含む津山圏域は、津山盆地とこれを取り巻く美作台地、及び北部は中国山脈で形成されている。

勝央町全体は南方に緩やかに傾斜する標高100m～200mの丘陵台地で、北部は、那岐山、滝山などの中国山地を背に受けて奈義町の日本原高原から緩やかな丘陵が起伏した台地を形成し、中南部は、滝山に源を発し、町の中心を南北に流れ吉井川に注ぐ滝川に沿って比較的平坦な盆地、平野を形成している。勝央町内では平成10年度までに約400カ所の遺跡が確認されていたが、平成11年度以来、町教育委員会が遺跡分布調査を実施中であり、新しく300カ所以上の遺跡が確認されている。⁽¹⁾

国司尾遺跡は、勝央町大字小矢田に所在する。小矢田地区は勝央町の南東部に位置し、東は美作町に接する。勝間田平野を挟んで北側が岡、黒土地区、南が小矢田地区で、周辺の低丘陵上には多くの遺跡が存在する。小矢田地区周辺では発掘調査された遺跡はほとんどなく、地域の歴史を詳述することは難しいため、以下では、勝間田平野の東部の遺跡について、時代を追って概観してみたい。

まず、弥生時代の遺跡では、岡の中小遺跡が存在する。小中遺跡は弥生時代中期から後期の集落遺跡で、300軒を越す住居跡が発見されており⁽²⁾、滝川下流域の拠点的な集落と考えられる。また、一帯の丘陵には弥生土器の散布地が点在しており、広範囲に集落が存在していたと考えられる。それらの一つに小池谷遺跡がある。現在、町教育委員会が発掘調査中であるが丘陵斜面に多くの段状遺構が発見され、小中遺跡に先行する弥生時代中期中頃の集落が確認されている。⁽³⁾また、小中遺跡の背後にある標高200mの間山山頂付近には最近の調査で後期を中心とした住居址が点在していることが判明した。⁽⁴⁾このように弥生時代の集落は勝間田平野から北側の低丘陵上に多く確認されている。続く古墳時代には、岡地区を中心に数多くの古墳が存在している。前期の首長墳には、間山山頂に前方後方墳である岡高塚古墳（全長56m）を筆頭に、前方後円墳の琴平山古墳（全長48m）、殿塚古墳（全長48m）が存在する。⁽⁵⁾中期には首長墓と考えられる古墳は確認されていない。中期後半には平地区の愛宕山古墳（全長26m）が候補として挙げられる。古式の群集墳では東光寺裏山古墳群、小池谷古墳群等が存在し、その他、美作町上相地区の中塚古墳群、小矢田地区から谷を挟んだ美作町明見の塚ヶ道古墳群も存在している。小矢田周辺では、宮ノ上古墳、坂田古墳等の小規模な円墳が丘陵頂部に存在し、さらに昭和57年には箱式石棺が緊急調査された落山古墳も存在している。周辺では古代の遺跡は不明な点が多く、小中遺



第1図 遺跡位置図



- | | | | | | | |
|-----------|----------|----------|----------|-----------|------------|-----------|
| 1.愛宕山古墳 | 2.平遺跡 | 3.勝間田遺跡 | 4.石佐上遺跡 | 5.保木散布地 | 6.東光寺裏山古墳群 | 7.勝間田古窯跡群 |
| 8.小矢田城跡 | 9.宮の上古墳 | 10.坂田古墳 | 11.落山古墳 | 12.国司尾散布地 | 13.天神散布地 | 14.宮の上散布地 |
| 15.琴平山古墳 | 16.殿塚古墳 | 17.間山瓦経塚 | 18.阿高塚古墳 | 19.高塚古墳群 | 20.間山高福寺跡 | 21.岩井谷古墳群 |
| 22.小中遺跡 | 23.小中古墳群 | 24.四糸古墳群 | 25.金尾古墳群 | 26.中塚古墳群 | 27.大年古墳群 | 28.小池谷遺跡 |
| 29.塚ヶ遺古墳群 | 30.三星城 | | | | | |

第2図 周辺の遺跡分布図

跡で奈良時代の掘立柱建物群が確認されているのみである。中世の遺跡も不明な点が多いが、畠屋、東吉田の谷筋には勝間田焼の窯が多数存在し、⁽⁷⁾ 勝間田古窯址群と呼ばれている。小矢田地区でも城谷奥窯、大成窯など現状で2基の窯が確認され、さらに美作町中山周辺にも窯が展開し、一つの子群に属するようである。中世後期には、小矢田城、戸倉城が築かれる。小矢田城は東西に三段の平坦面が認められる。また、周囲の丘陵には石造物が多く存在するなど、これら以外にも城に関連する施設の存在が予想される。

(注)

- (1) 勝央町教育委員会編『勝央町遺跡地図』2003年3月刊行予定
- (2) 栗野克巳・高畠知功「小中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』7 岡山県教育委員会 1975
浅倉秀昭ほか「小中遺跡 白溢古墳群 小中古墳群 湯ヶ溢古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』117 岡山県教育委員会 1997
- (3) 平成13年度～14年度にかけて勝央町教育委員会が調査を実施。報告書未刊。
- (4) 平成13年度に岡山県古代吉備文化財センターが調査を実施。報告書未刊。
- (5) 倉林真砂斗ほか『美作の首長墳』2001
近藤義郎編『前方後円墳集成 中国・四国編』1992
- (6) 脇田博『落山古墳』勝央町教育委員会 1983
- (7) 伊藤晃「窯業」『岡山県の考古学』1987

(その他参考文献)

- 勝央町編『勝央町誌』1984
木村増夫『勝央今昔滻川のはとり』1978



小矢田城遠景(北から)

第2章 発掘調査の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

現在、岡山県では美作園城と岡山園城との連携を強化し、沿線の地域開発や豊かな自然を生かした地域振興を支援する目的から県内東部を横断する美作岡山道路の建設が計画されている。道路の路線は勝央町小矢山地区をかすめることになった。これに伴い、路線内には多くの個人墓地等が存在する



第3図 計画地周辺図

ため、路線外にあらたに共同墓地を造成してこれらを移転する必要がでてきた。共同墓地造成の予定区域には周知の国司尾散布地B、墓地への進入路は国司尾散布地Aが存在することから、その保存について事業主体者である勝央町建設課と協議を行ったところ、まず確認調査を実施した後、遺跡が確認された範囲については全面調査を実施することになった。そのため、他に調査中であった現場を中断して、平成13年8月に急遽試掘調査を実施した。その結果、墓地予定地全域から弥生時代を中心とする遺構が確認されたため、事業者である勝央町は同町教育委員会に平成13年9月14日付けで文化財保護法57条の3の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、再度協議を行った。町は墓地の造成工事は平成13年度中に完成予定で速やか

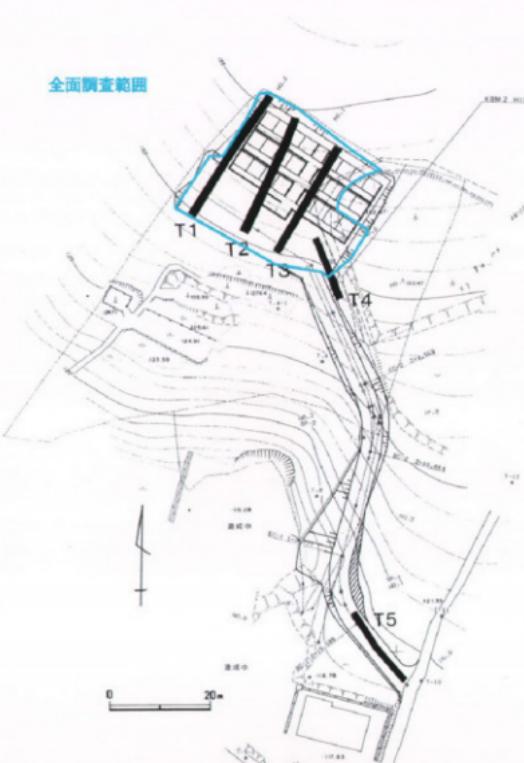
に本調査を終了してほしいということであった。現地調査は平成13年12月までに完了させるということで合意した。調査は平成13年10月24日に着手し、12月5日までの延べ1カ月余りで調査を終了した。

第2節 発掘調査の経過と概要

1. 確認調査

確認調査は平成13年8月28日から9月4日の実働4日間で行った。墓地造成予定地に3本、進入路予定地に2本の計5カ所にトレーンチを設定し、遺跡存在の有無と範囲の確認を行った。まず、墓地予定地では3つのいずれのトレーンチからも遺構が確認された。表土を除去するとすぐ地山であり、一部岩板が露出する状態であった。このうちT1からは弥生時代の段状遺構が検出され、土器も出土した。またT3では住居址が検出された。その他には近世墓が確認された。進入路にはT5を設定し精査したが、遺構、遺物とも確認されなかった。

以上の確認調査の結果、墓地予定地内を含めて丘陵一帯は弥生時代の集落跡が広がっていると判断し、墓地造成により削平を受ける部分については全面調査を実施することとなった。



第4図 確認調査トレーンチ配置図

2. 発掘調査

確認調査の結果を基に町建設課と協議を重ねた結果、工事はほとんどが切土で丘陵を削平するため現状での保存は難しいと判断されたことから、墓地予定地は全域を調査することになった。調査は平成13年10月24日から12月5日までの期間で実施した。

調査は、表土下すぐに地山のため、重機で表土をすべて除去したのち人力で遺構の精査、掘削を行った。さらに、個別の遺構については半裁、もしくは土層観察用のベルトを残し、実測、写真撮影等の記録を作成した。図面では、個別遺構を1/20、全体平面を1/50縮尺で作成した。

3. 日誌抄

10月24日(水) 本日より調査開始、重機により表土除去開始、同時に作業員を投入して流入土を掘削。

10月29日(月) 部分的に焼土を確認、火葬墓を検出。

10月31日(水) 重機による表土除去終了。引き続き遺構検出を行うが、遺構が見分けにくくやや手間取る。

11月12日(月) 本日より遺構掘削開始。随時土層の写真、図面をとる。

11月22日(木) ほぼすべての遺構を完掘。

12月3日(月) 調査区を清掃し、全体写真を撮影。さらに全体図を作成。

12月5日(火) 発掘調査終了

第3節 発掘調査の体制

平成13年度（2001年）

調査主体

勝央町教育委員会 教育長 岸本耕二

社会教育課 課長 福本浩二

課長補佐 石川寛次

主任 竹内祐三

技術史員 國 正雄（調査担当）

主事補 畠本具功



調査前全景(北西から)

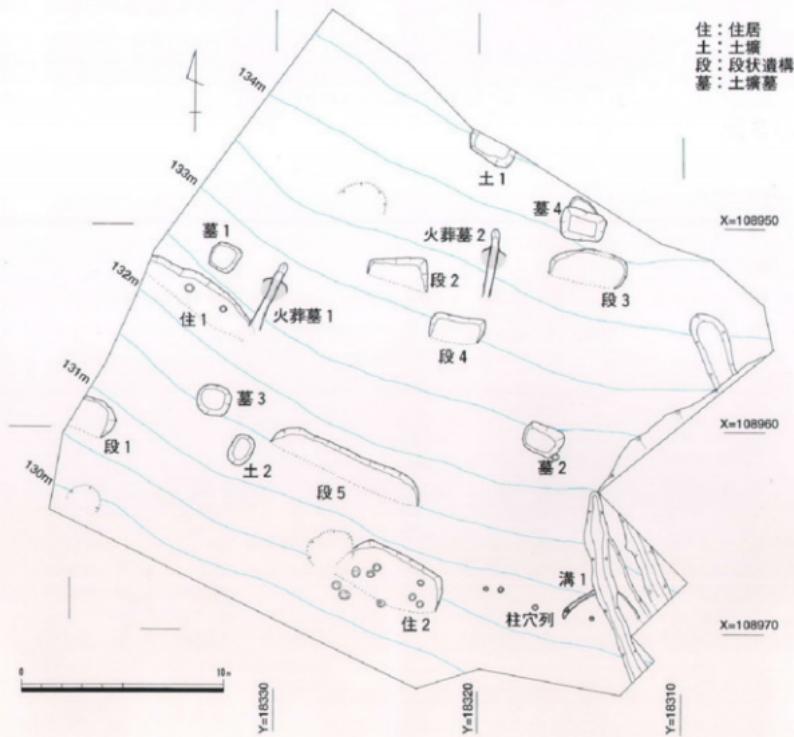


試掘調査風景(南から)

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の立地と調査区の概要

国司尾遺跡は、勝間田平野の南側の丘陵上、北に向けて尾根が幾筋にも分かれ、平野からはやや奥まった比較的平坦な尾根上に存在する。今回の調査区は、この尾根の平坦部から南斜面にかけての約800m²分である。遺跡の範囲は尾根平坦部全域から南西斜面に広がるものと考えられ、さらに南に延びる小さい尾根の平坦部全域にも広がるものと考えられる。一帯には北側の尾根続きに天神散布地、さらに北側の緩斜面には宮ノ上散布地が存在するなど、広範囲にわたって遺跡が密集する地域もある。調査区全体の基本層序は表土、黄色砂質土（流土）、地山の順である。地山は、頂部付近では岩盤が露出する部分や黄色砂礫土、斜面東南部では赤色粘質土などがみられ多様である。検出した遺構は、調査区全域において、弥生時代の住居跡2基、段状遺構5基、土壙2基、溝1条、ピット多数のほか近世以降の土壙墓5基、火葬墓2基である。



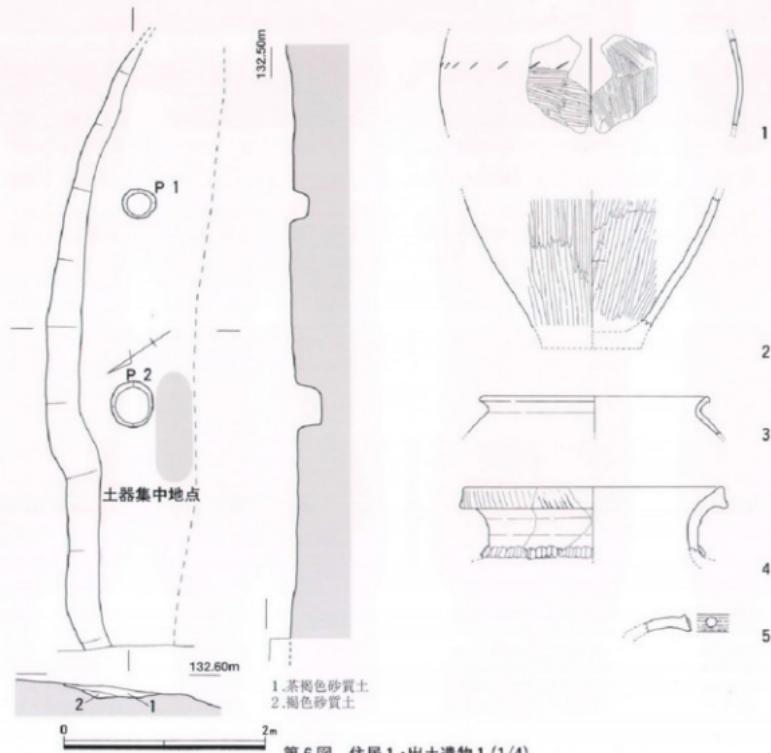
第5図 遺構全体図

第2節 調査の概要

1. 弥生時代の遺構・遺物

住居1（第6図）

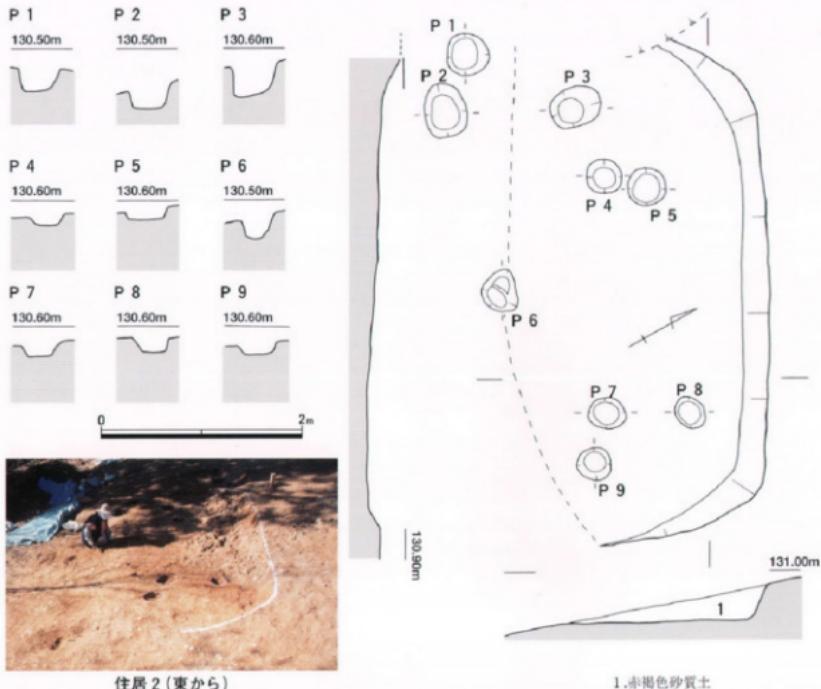
調査区西端、標高132.50m付近に位置する段状遺構である。付近は斜面がきつくなつた位置で残りはよくない。規模は西側が調査区外へ続くため全体を検出しえなかつた。確認した長さは5.8m、南側



住居1（東から）



住居1（土器出土状況）



住居 2 (東から)

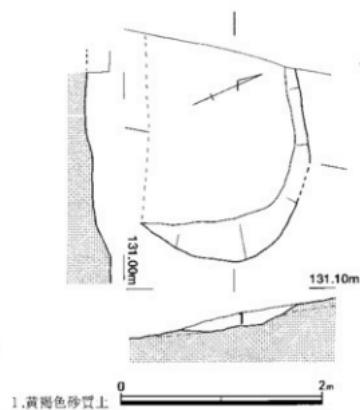
1.赤褐色砂質土

第7図 住居 2

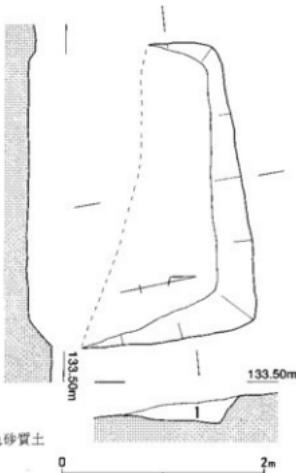
が流されているため幅1.7mを残すのみである。遺構の深さは、一番深いところで15cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、明確な周壁構は確認できなかった。柱穴は2つ確認できた。規模は直径30cmと直径40cm、柱間は2.0mを測る。埋土は2層に分層できる。埋土は丘陵上部からの流入土であるが、2層は褐色砂質層で土器、弱冠の炭を含む層である。遺物は弥生土器が出土している。とくにP2の周辺の床面上から多く出土している。1～3は壺、4、5は壺である。1、2は同一個体の壺と思われる。体部中位に列点文が見られ、調整は外面ミガキ調整で、内面下半分はミガキ、中位から上はハケも見られる。3は壺口縁で端部が外に肥厚する。4は広口壺口縁で端部に面を持ち、斜線の刻目を施す。頸部には指頭圧痕文突帯を巡らしている。5は広口壺口縁で、端部に凹線文を施す。円形浮文・端部下端にヘラで切り込みが存在する。

住居 2 (第7図)

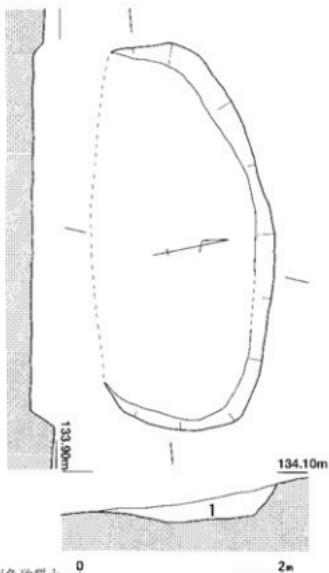
調査区の南端、標高130.50m付近に位置する段状遺構である。規模は長さ5.0m、幅は南側が流されていることから2.4mを残すのみである。形状は不整形の長方形を呈する。遺構の深さは検出面から30cm程度で、床面はほぼ平坦である。柱穴は9つ確認され、ピット2・3・7がまとまりになっていると考えられるが判然としない。規模は直径30cm～40cmのものが多い。埋土はほぼ一層で、赤褐色砂質土を中心とする。土器はわずかに検出面から弥生土器片が出土しているのみで図化できなかった。



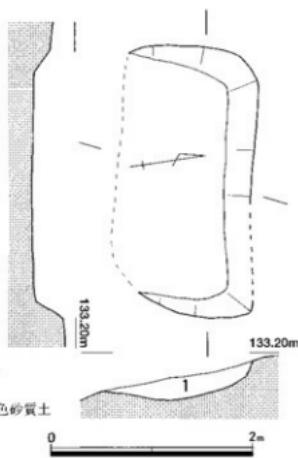
第8図 段状遺構1



第9図 段状遺構2



第10図 段状遺構3



第11図 段状遺構4

段状遺構1（第8図）

調査区の西南、標高131.00m付近に位置する段状遺構である。規模は西側が調査区外へ統くため全体を検出し得なかった。確認した長さ2.0m、幅は確認した範囲で1.6mを測り、形状は長方形を呈する。遺構の深さは検出面から10cm程度で、床面はほぼ平坦である。柱穴は範囲内では確認できなかった。埋土は、単一層で黄褐色を呈する砂質土である。土器等の遺物は出土しなかった。

段状遺構 2 (第9図)

調査区の中央、標高133.00m付近に位置する段状遺構である。規模は長さ2.9m、幅は南側が流されているため、1.7mを残すのみであり、形状は長方形を呈する。遺構の深さは山側で15cm程度である。床面はほぼ平坦であるが、周壁溝、柱穴は確認されなかった。埋土は、赤褐色の單一層で、自然な斜面の堆積状況を示す。遺物は出土しなかった。

段状遺構 3 (第10図)

調査区の北東、標高134.00m付近に位置する段状遺構である。規模は、長さ3.8m、幅は南側が流されているため1.8mを残すのみである。形状は長方形を呈する。遺構の深さは検出面から20cm程度で、床面はほぼ平坦である。周壁溝、柱穴は確認されなかった。埋土は、單一層で黄褐色を呈する砂質土である。土器等の遺物は一切出土しなかった。

段状遺構 4 (第11図)

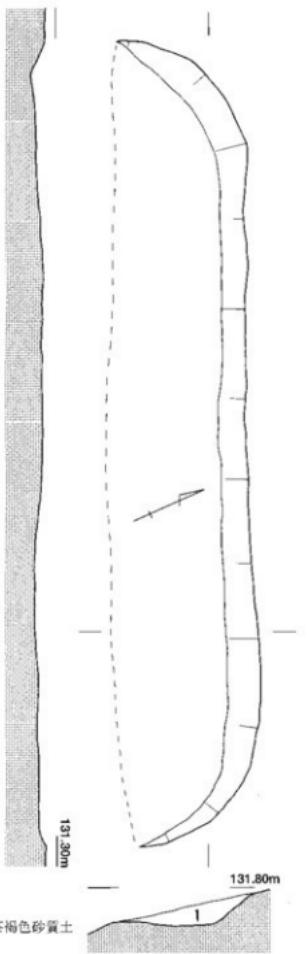
調査区の中央、標高133.00m付近に位置する段状遺構である。北西2mの位置に段状遺構2が存在する。規模は長さ2.6m、幅は南側が流されているため1.3mを残すのみである。形状は不整形な長方形を呈する。遺構の深さは検出面から15cm程度で、床面はほぼ平坦である。周壁溝、柱穴は確認されなかった。埋土は一層で赤褐色を呈する砂質土である。土器等の遺物は出土しなかった。

段状遺構 5 (第12図)

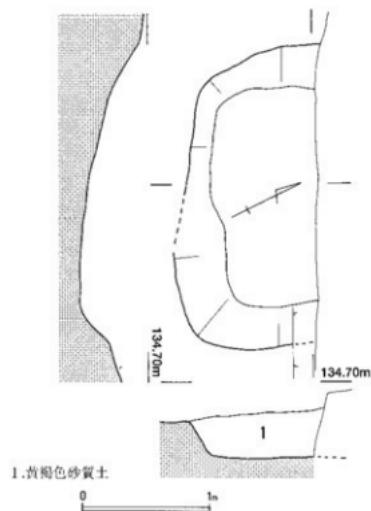
調査区の中央、標高131.50m付近に位置する段状遺構である。規模は、長さ8.0m、幅は残った範囲で1.3mを測り、形状は隅丸の長方形を呈する。遺構の深さは検出面から15cm程度で、床面はほぼ平坦である。柱穴は範囲内では確認できなかった。埋土は、單一層で茶褐色を呈する砂質土である。土器等の遺物は一切出土しなかった。

土壤1 (第13図)

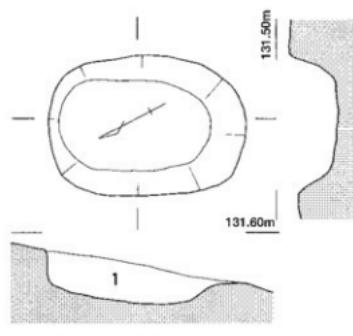
調査区北端、標高134.50m付近、丘陵平坦部と斜面の境に位置する。北半分は調査範囲外であるが、平面形は長方形もしくは正方形と考えられる。規模は、長軸2.4m、短軸は検出範囲で1.0mを測る。



第12図 段状遺構 5



第13図 土壌1



第14図 土壌2

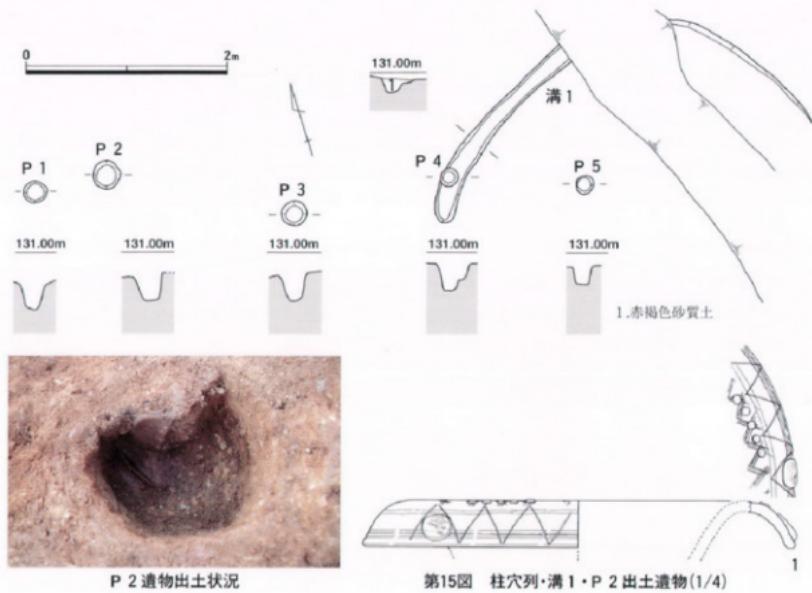
深さは検出面から50cmで、底面の高さは標高135.90mである。埋土は一層で、黄褐色砂質土が堆積している。遺物等は上層から弥生土器小片が出土しているが固化できなかった。

土壌2（第14図）

調査区の西南、標高131.50m付近に位置する。すぐ東側には段状遺構6が存在する。平面形は既に長い不整円形を呈し、規模は長軸約1.6m、短軸1.1m、深さは検出面から40cmを測る。検出段階から赤く変色した焼土が確認され、上層の観察では褐色の焼土層の単一層であった。出土遺物はなかったが、炭片がわずかに出土している。

柱穴列・溝（第15図）

調査区南東端にまとまったかたちで5つのピットが確認された。付近はやや斜面が緩くなっており、斜面に併行する形で距離をおいて存在する。ピットの規模は直径15cm～20cm、深さは10cm～15cm程度のもので小さいものがほとんどである。ピットは一列には並ばず一連のものか不明である。また、ピット4を切るように、近接して溝1が存在する。ほぼ南北に伸び、北側は削平されている。残存長は2.2m、幅20cm、深さ15cmである。遺物は出土していない。遺物はピット2、ピット5から弥生土器片が出土している。ピット5出土の弥生土器は小片のため固化できなかった。1は器台の口縁と考えられる。外下方に折れ曲げて面をつくり、文様を施す。外面にはヘラ描の巨齒文、円形浮文、上端にはヘラ描斜格子文、円形浮文を施す。ピット2からは固化した1の他、甕片も出土している。



第15図 柱穴列・溝1・P 2 出土遺物(1/4)



発掘調査風景(西から)

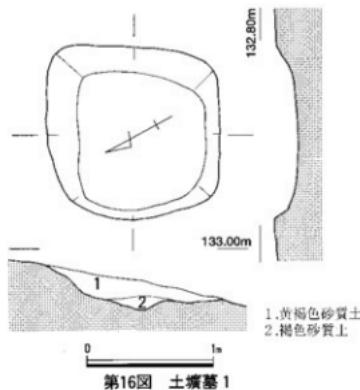
2. 近世以降の遺構・遺物

土壙墓1（第16図）

調査区の西の中腹、標高132.50m付近に位置する。住居1のすぐ北側である。平面形は方形を呈し、規模は直径約140cm、深さは検出面から20cmを測り、比較的浅い。埋土は、黄褐色砂質土、褐色砂質土が堆積し、疊はほとんどない。遺物等は出土せず、遺構の詳細な時期も不明であるが、近世のものと思われる。

土壙墓2（第17図）

調査区の東端、標高132.50m付近に位置する。平面形はやや東西に長い長方形を呈し、規模は長径約210cm、短径120cm、深さは検出面から30cmを測る。埋土は、褐色砂質土が堆積し地山の疊が多くまじる。また、ピットが近接して存在する。いずれも遺物等は出土しなかったが、近世のものと思われる。

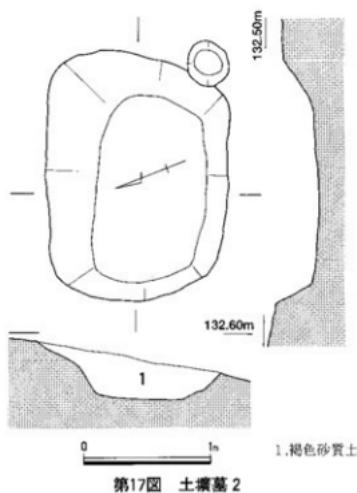


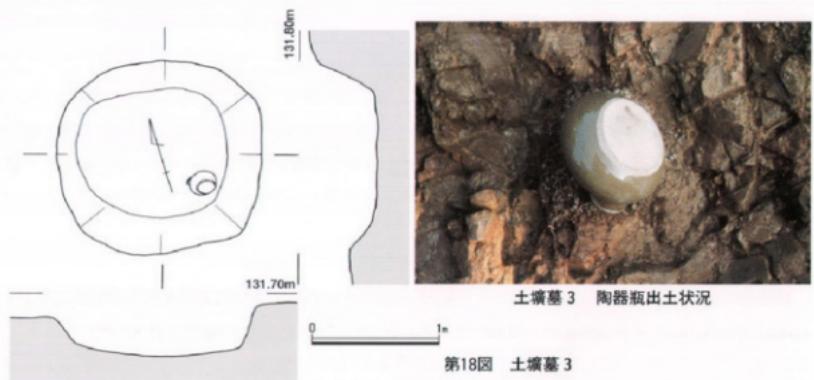
土壙墓3（第18図）

調査区の西南、標高131.50m付近に位置する。すぐ南側に土壙2が存在する。平面形は方形を呈し、規模は直径約150cm、深さは検出面から40cmを測る。埋土は、褐色砂質土が堆積し、地山付近では黒色の腐食土層がわずかにみられた。出土遺物は、近現代のものと思われる陶器瓶が出土した。

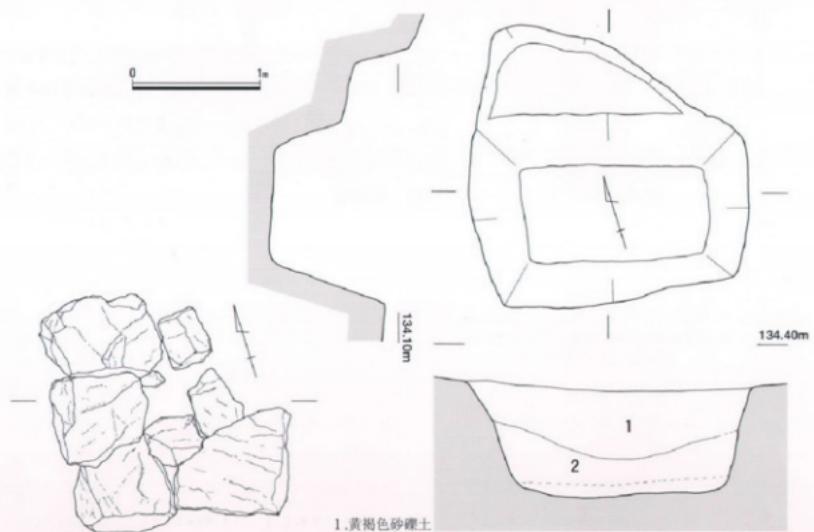
土壙墓4（第19図、20図）

調査区の北端、標高134.00m付近に位置する。表土上に30cm大的石材が方形に配石されていた（第19図）ので掘り下げるとき、土壙が検出された。一応、土壙墓としたが底面からは牛の全身骨が検出されたため、正確には牛の埋葬墓である。平面形は長方形を呈し、規模は長径約210cm、短径150cm、深さは検出面から80cmを測る。埋土は、大きく2層に分層され、上層には黄褐色疊土、下層は腐食層のまじる褐色層が堆積する。牛骨は大半が腐食し残っていなかったが、頭の骨が床面西側、足の骨が床面東側に残存しており、ほぼ全身を埋葬したものと考えられる。しかし遺物等は出土しなかったため、遺構の詳細な時期も不明であるが、近世以降のものと思われる。





第18図 土壙墓3



第19図 土壙墓4 直上石組

1. 黄褐色砂礫土
2. 棕色砂質土

第20図 土壙墓4



土壙墓4 直上石組

土壙墓4 牛骨片検出状況(北から)

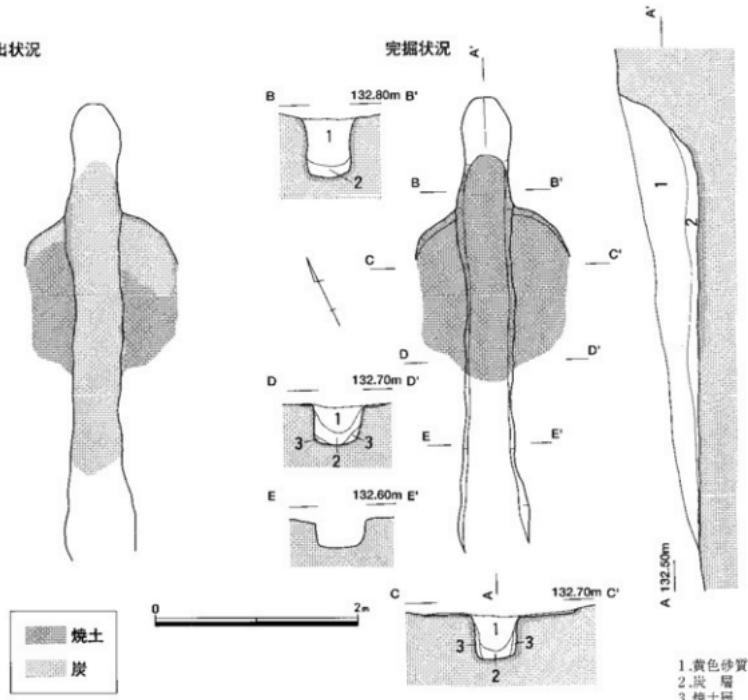
火葬墓1（第21図）

調査区の中央付近、標高132.50m付近に位置する火葬墓である。長さ1.2m、幅1.3mの方形の範囲が赤く焼けた焼土面が存在し、中央を切るような形で斜面に直交する長さ3.5m、幅38cmの溝が取り付く。焼土面は山側を削り出して水平にしていることから、本来は方形の土壇状の掘り込みがあったと考えられる。溝は、縦断面で見ると段状に削って底面を水平にしており、山側で急に立ち上がる。深さは山側の深い所で60cm、谷側で10cmを測る。横断面は方形を呈し、側壁をほぼ垂直に削り出している。堆積状況は、検出段階では流土である黄色砂質土で全体が覆われておらず一部に焼土、炭が確認できる程度であった。流土を除去した後に溝内、焼土上面に炭の層が確認された。炭の層除去後は地山となるが、中央の焼土面付近では溝内部も赤く焼けている。出土遺物は、中央付近の炭層中から焼け残りとみられる骨の一部が出土している。その他の土器などの遺物はなく、詳細な時期は不明である。

火葬墓2（第22図）

調査区の中央付近、標高133.50m付近に位置する火葬墓である。特徴、規模等、火葬墓1と共通点が多い。西側がやや削平されているが、長さ1.0m、幅1.3mの方形の範囲が赤く焼けた焼土面が存在し、中央を切るような形で斜面に直交する長さ3.4m、幅40cmの溝が取り付く。焼土面は山側を削り出して水平になっており、土壇状の掘り込みの底部にあたると考えられる。溝は、縦断面で見ると段状

検出状況



第21図 火葬墓1



火葬墓1炭検出状況(西から)



火葬墓1骨片検出状況



火葬墓1完掘状況(西から)



火葬墓1炭層断面(南から)

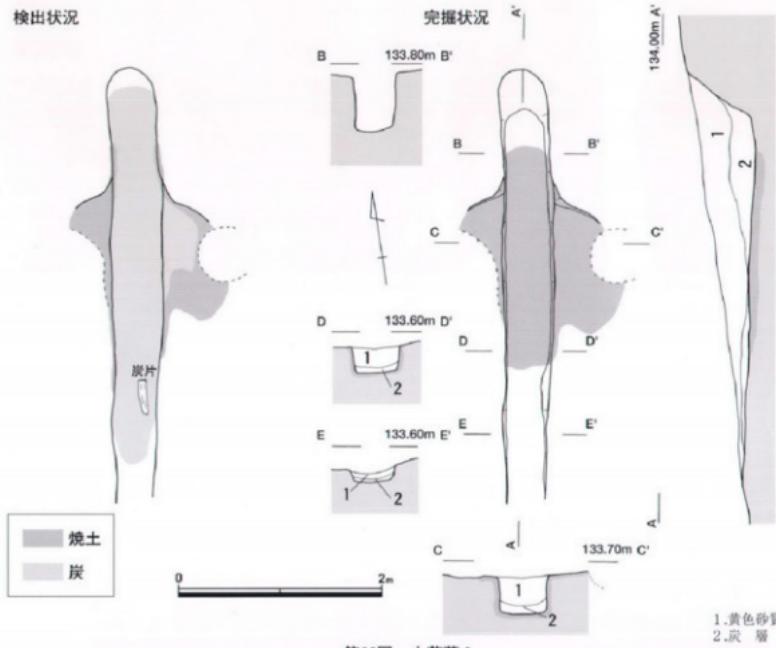


火葬墓1完掘状況(南から)



火葬墓1調査風景(南東から)

に削って底面を水平にしており、山側で急に立ち上がる。深さは山側で50cm、斜面側で15cmを測る。横断面は方形を呈し、側壁をはば垂直に削り出している。堆積状況は、検出段階は流土である黄色砂質土で覆われておらず、炭、焼土が確認できる程度であった。除去した後に溝内、焼土上面に炭層の堆積が確認された。溝の谷側で焼成時の燃料の焼け残りと考えられる木炭片が存在し、この部分が焚き口にあたると考えられる。炭層除去後は地山となるが、中央の焼土付近は溝内部も赤く焼けている。出土遺物は、中央付近の炭層から焼け残ったとみられる骨の一部が出土している。また、その他の土器などの遺物はなく、詳細な時期は不明である。



第4章 ま　と　め

国司尾遺跡は、從前、弥生土器・勝間田焼が散布する散布地とされていたが、調査の結果により、
弥生時代中期の集落跡、近世の墓地であることが判明した。

まず弥生時代の遺構では、住居跡2基、段状遺構5基、土壙2基が検出された。遺構密度は散漫な
状況で遺構に伴う遺物も少ない。住居1から出土した土器はおおむね弥生時代中期中葉に比定され、
他の遺構もほぼ同時期のものと考えられる。丘陵斜面のわずかな範囲であるため遺跡の全容を把握す
ることは困難であるが、国司尾遺跡の範囲は周辺の地形から今回の調査区の西側斜面、丘陵頂上部、
さらに南東に張り出す平坦な尾根全体に広がっているものと思われる。⁽¹⁾

さらに国司尾遺跡周辺には、谷を挟んで北側の丘陵に天神散布地、その北側には宮ノ上散布地が存
在している。弥生土器や石器の散布地として周知されており、丘陵頂部から平野を見渡せる北斜面、
東斜面一帯には、広く弥生時代の集落が広がっているものと考えられる。国司尾遺跡もその遺跡群の
一部にあたると考えられる。

近世の時期では近世墓5基、火葬墓2基を検出した。当地は小矢田集落の公有地であり、付近に墓
地が多数存在することから、今回の調査区も近世以降には集落墓地として利用されていたと考えられ
る。近世墓では遺物がほとんど無く時期を特定できるものが少ない。わずかに近代の陶器を収めたもの
があり、おおむね近世～近代の所産と考えられる。また、特殊なものに火葬墓がある。時期を決定
する遺物がないため不明な点が多い。状況から読み取ることは、遺体を入れた桶を置くために地面
を平坦にし、それを貫くように溝を掘削して通風機能を高めている。桶を設置後、溝の端で薪などを
燃やして遺体を入れた桶を燃焼させる様子が復元できる。この火葬墓について深く検討する余裕は無
いが、似た構造の遺構は中世の事例が多く、愛知県一の谷中世墓群、奈良県谷畠中世墓、大阪府金剛
寺中世墓地等で確認されている。⁽²⁾これらは火葬墓のなかでもやや特異な形態として位置付けられるよ
うである。近隣では近世の事例として津山市西奥田遺跡で似た構造のものが発見されている。⁽³⁾今回発
見された火葬墓が中世から続くものとして位置付けられるのか、もしくは近現代にみられる集落共同
の火葬場に類するものか判然としない。これについては今後の課題として、資料の増加を待って検討
したい。

(注)

(1)美作の弥生中期の土器編年は細分がなされているが、問題を多く残している。ここでは以下の文
献を参考にした。

行田裕美「西吉田遺跡」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告」第17集 1985

(2)中世の火葬墓については以下の文献を参考にした。

斎藤忠「第一章二中世の火葬墓と一の谷中世墳墓群」「一の谷中世墓群遺跡調査報告書」磐田
市教育委員会 1993

兼康保明「古代・中世の墓制」「日本佛教基礎資料集成」中央公論美術出版 1976

(3)安川豈史「西奥田遺跡」「年報津山弥生の里」第2集 1995

写 真 図 版



住居 1 (東から)



住居 2 (東から)



段状遺構 1 (東から)

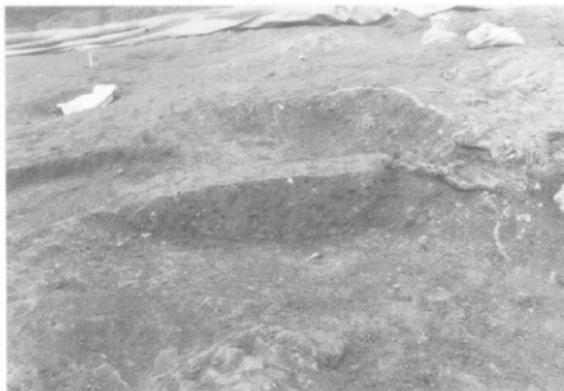
図版 2



段状遺構 2 (東から)



段状遺構 3 (西から)



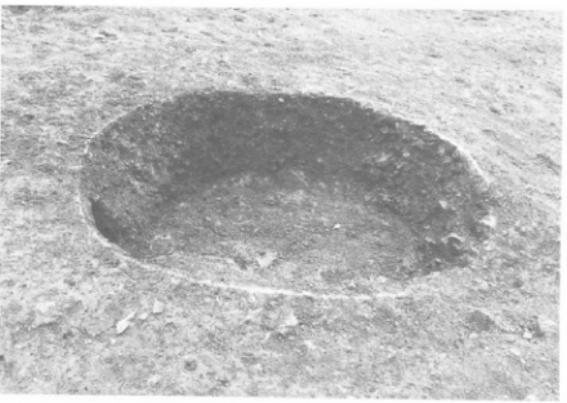
段状遺構 4 (東から)



段状遺構 5 (西から)



土壤 1 (東から)



土壤 2 (西から)

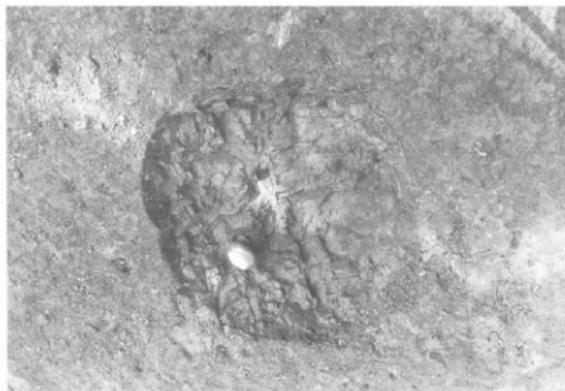
図版 4



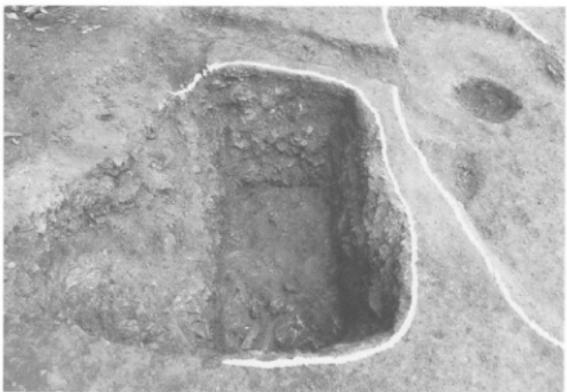
柱穴列・溝 1 (東から)



土壙墓 2 (西から)



土壙墓 3 (東から)



土壤墓 4 (西から)



火葬墓 1 (西から)



火葬墓 2 (西から)

報告書抄録

ふりがな 書名	くにしおいせき 国司尾遺跡						
シリーズ名	勝央町文化財調査報告						
シリーズ番号	5						
編著者名	園 正雄						
編集機関	勝央町教育委員会						
所在地	〒709-4316 岡山県勝田郡勝央町勝間田201 TEL 0868-38-3111						
発行年月日	2002年3月29日						
ふりがな 所収遺跡所在地	ふりがな 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °'"	東經 °'"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
くにしおいせき 国司尾遺跡	おかやまけんかつたぐん 岡山県勝田郡 しょうおうちょう 勝央町 おやたあざくにしお 小矢田字国司尾 976他	33622	134° 07' 56"	35° 01' 26"	20011024 ~ 20011205	800	共同墓地造成に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
国司尾遺跡	集落跡	弥生時代 (中期)	住居跡 段状遺構 上壙 ピット	2軒 5基 2基 5基	弥生土器		
		近世	土塚墓 火葬墓	4基 2基	人骨		

印刷データ

紙 質 表 紙=ハイマックスレーマットアート220K

本 文=サテン全巻110K

写真 国版=サテン全巻110K

文 字 モリサワ書体 13Q・明朝・正体

本文画面 Macintosh

写 真 カ ラ ー=4色分解

本文写真=カラースキヤナー175線

写真国版=モノクロスキャナー175線

勝央町文化財調査報告 5

國 司 尾 遺 跡

**共同墓地造成に伴う
発 挖 調 査**

2002年3月29日発行

編集・発行 勝央町教育委員会

〒709-4316 岡山県勝田郡勝央町勝間田200-1
TEL (0868-38-3111)

印 刷 株式会社廣陽本社

〒708-0052 岡山県津山市田町22
TEL (0868-22-7221)



火葬墓調査風景



調査前風景(北から)